

【作文（エッセイ）部門 最優秀賞】「あんたいい人やね」四十万由美子さん（富山県）

今から 22 年前、子供の手も離れた頃、介護のこともよくわからず、資格ももたず飛び込んだヘルパー派遣の仕事。その前年に急死した父親を介護することもなく失ったことで、介護を必要としている人の役に立てればよいなと思ったこともヘルパーとして働くきっかけだった。

ヘルパーになってまだ日が浅いころ、はじめての利用者宅に臨時で訪問することとなった。認知症がありほぼ寝たきりの女性。家族は「認知症家族を抱える家族の会」の会長。それを聞いただけで新米ヘルパーの私は緊張と不安で一杯だった。

仕事内容は介護者が外出されるのでその間のおむつ交換、清拭と見守り。

先輩ヘルパーからは、いつも寝ているし話しもできないから、心配することないと。家族からは本人は手をいろいろ動かすかもしれないが遊んでいるだけだから気にしないでと。

おむつ交換・清拭も終え、そろそろ終了時間、家族からは時間になったら帰ってくださいねと言われている。

ふと、本人を見ると聞いていた通り手を宙で動かしている。ああ、これが本人の遊び？運動？と思ってみているとその手を胸に当て押える仕草。顔をしかめているようにも見える。苦しいの？聞いても何も言わない。

どうしよう。家族へは連絡つかないし、救急車を呼ぶほどでもないだろうし……。

その手が上下し始め自分でさすっている。さすれば楽なのか？私はいろいろな想像をめぐらせながらも本人の衣類を緩めその胸をそとまで始めた。大丈夫？苦しくない？何を聞いても答えてくれない。帰ってよいという時間にはなっているけれど、心配でずっと顔を見つめながらその胸をなで続けていた。ほどなくして、ずっと閉じていたその目がそと開き私を見る。そして唇が動いた。

「あんた、いい人やね」

か細い声だがしっかりと私の耳に届いた。そして宙をつかんでいたその手は私の手に重ねられていた。話せないんじゃないの？そのあとは何を話しかけても言葉が返ってくることはなかった。私のしたこと、少しは喜んでもらったの？

私はその後、ヘルパー資格を取り、介護福祉士の資格を取り、そして介護支援専門員となり現在、地域包括支援センターで主任ケアマネジャーとして勤務している。仕事を一つ一つ覚えながら、利用者さん、地域の人に関わっている。時には自分の無能さに嘆き、心無い言葉に傷つき、やるせない気持ちになったことも少なくない。そんなとき必ずあの声が聞こえてくる。「あんたいい人やね」

私は、自分の脳裏にあるその光景を励みに、自分ができる精一杯のことをして行こうと自分を奮い立たせている。そしてこれからも、多くの仲間を支えられて、沢山の利用者さんに関わらせてもらって生きていく。

【短文（ポエム）部門 最優秀賞】「寢息」志賀千鶴さん（福島県）

寢息
眠れないと
言っていた父の
足をもんだ
スースーという
寢息がきこえた
うれしくなった

【フォト部門 最優秀賞】「今年もきれいに咲いたよ」越水淳さん（和歌山県）



（掲載用として画像データをご入り用の際は下記担当者までご用命ください）

※第6回介護作文・フォトコンテストの「ビデオ部門」受賞該当作品はありませんでした。

以上